自己意識と公私社会認識に関わる行動との関連

Relationship Between Self-Consciousness and the Social Cognitive Behaviors Regarding the Public-Private Distinction.

山　形　恭　子
Kyoko Yamagata

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between public and private self-consciousness and social cognitive behaviors with regard to the public-private distinction ; university students were the participants. Four hundred fifty-four undergraduates participated in this questionnaire study. The self-consciousness scale for Japanese (Sugawara, 1984) and the social cognitive behavior scale (Yamagata, 2004) were used for the questionnaire in this study. Using the results of the self-consciousness scale, we assigned the participants into two groups : one with high public self-consciousness scores and one with high private self-consciousness scores. The factor analysis of the items on the social cognitive behavior scale revealed that there were four main factors : private use of public objects and materials, emotional expression in public, personal appearance in public, and manners in public. The total scores for these factors showed that significant differences between the two participant groups were found for manners in public and the private use of public objects and materials. The results were interpreted according to the theory of differences in public and private self-consciousness.

Key Words : public-private self-consciousness, social cognition, university students,

public-private distinction, factor analysis.

問　題

人は自己を常に意識しているとは限らないが，周囲の他者が自分に注視する，自分が鏡やカメラに映し出される，あるいは，自分の声をテープで聞くなどの特定状況下においては自分自身を強く意識して自己を対象化し，自己の行動を点検してコントロールすることが知られている（Buss, 1980; Duval & Wicklund, 1972; Feningstein, Scheier & Buss, 1975；押見，1992; Scheier, 1980など)。自己意識の明確化や自己の対象化はわれわれの行動に変化をもたらす契機を与え，人の社会的行動を理解する上で重要な要因である。

自己意識は意識の対象・焦点が自己に向けられていることを指すが，自己意識研究においてはこれまで発達心理学や社会心理学の視点から諸理論が提起されてきた（安藤・押見，1998; Buss, 1980; Feningstein,1984；梶田，1988；押見，1992; Stern, 1986; Wicklund, 1975)。本稿ではそれらのなかの代表的な理論である自己意識特性論ならびに自覚状態理論に立脚し，自己意識の公私社会認識に関わる行動への影響を吟味する。

Wicklund(1975)は自己意識を人が自分自身に注意を向けている状態と定義し，自覚状態(self-awareness)あるいは自己注意(self-attention)，自己フォーカス(self-focus)と同義に捉えて，自覚状態理論(self-awareness theory)を主張している(Duval & Wicklund, 1972; Wicklund, 1975)。Wicklundの自覚状態理論によれば，自分自身への注意（自己フォーカス）が高まり，自覚状態になると，人はその場で最も関連性が強く，かつ重要な自己の側面について考え，自己点検や自己評価をおこなって自己の行動をコントロールするという。自己点検や自己評価においてはあるべきとされる正しさの規準（価値観）と現実の自己の姿が比較検討され，自己の行動が規準に適合しているか否かが吟味される(押見，1992)。

このような自覚状態理論を支持する研究としてScheier, Feningstein & Buss

(1974)の実験がよく知られている。彼らは学習課題を課せられた女性が誤反応をした時に，男性の実験参加者が罰として電気ショックを与える実験事態を設定し，男性の実験参加者がどの程度の強さの電気ショックを女性に与えるのかを検討した。彼らの実験では男性の実験参加者の自己フォーカスが高まる条件，すなわち，実験室に他者が存在して実験参加者とアイコンタクトがある条件と自己フォーカスが高くならない条件としてアイコンタクトがほとんどない条件ならびに実験室に他者が存在しない他者不在条件の3つの実験条件を設定している。結果はアイコンタクトがある条件で他の2条件よりも電気ショックの強度が弱いことが示され，男性の実験参加者が他者のまなざしによって自己フォーカスが高められて自覚状態が強まり，規準や価値観に適合した行動をおこない，女性に対して紳士的に振舞うことが明らかにされている。

Scheierらのこの実験のように自覚状態が高まると，一般に規準や価値観に合致した行動が生起することが実証されているが，しかし，自覚状態が高まって自己点検や自己評価をおこなう際に，人はしばしば自分の行動が規準に合致していないことや規準に到達していないことに気づく。このような状況に置かれると，人は自己非難や自己卑下の不快な感情を体験するが，この不快な体験は自己に向けられていた自己フォーカスを自己から逸らせて外的環境へと向かわせ，自覚状態を回避するか（注意転化・回避），あるいは，自己を規準や価値観に近づける（規準適合）ように動機づける。そして，どちらの方向に動機づけられるかはその人が置かれている状況における規準やその人がもつ信念や価値観，他者からの役割期待に規定されると仮定されている（押見，1992；菅原，1986）。

上記のように，自覚状態理論では自己フォーカスを通じて自分の行動が規準や価値観に適合しているか否かが自己点検や自己評価され，自らの行動をコントロールすると想定しているが，本理論に関してはこれまで多くの実証研究が試みられ，その妥当性が検証されるとともに，新たなモデルの構想も示唆されている（安藤・押見，1998；Buss, 1980；Carver & Scheier, 1978；押見，1992）。

これに対して一方，Feningstein, Scheier & Buss (1975)は自己意識の強さを自分に注意を向けやすいパーソナリティ特性（自己意識特性）と捉えて，自己意識の強さにおける個人差を測定する尺度（自己意識尺度）を作成している。彼らは自己意識特性を私的自己意識(private self-consciousness)と公的自己意識(public self-consciousness)の２つのタイプ・次元に分け，自己の私的で内面的な感情や態度に注意を向けやすいパーソナリティ特性を私的自己意識，他方，自己の外的・対人的側面に注意を向けやすい，あるいは，他者から見られている容姿や行動に注意を向けやすいパーソナリティ特性を公的自己意識と特徴付けて，両特性の違いを検討している。彼らは質問紙調査に基づく因子分析によって自己意識尺度の構成成分を分析し，私的自己意識と公的自己意識，対人不安の３因子を見出している。これらの３因子においては私的自己意識と公的自己意識の間に中程度の相関が見られること，また，対人不安と私的自己意識とは無相関であるが，対人不安と公的自己意識の間には弱いかまたは中程度の相関が見られることを明らかにしている。また，Feningstein らの質問紙を用いた日本人対象者に関する研究では自分の容姿に対する関心の因子が発見され，公的自己意識と相関することも示されている（押見，1992）。その他に，公的自己意識は他者の評価的フィードバックに敏感である，集団では孤立しないように行動するなど対人場面における自己の位置づけや自己呈示と関連した行動の関与も指摘されている(Feningstein, 1979 ; Scheier, 1980 ; 菅原，1986)。

自己意識特性に関する研究はこのように多数蓄積されているが(工藤, 1990 ; 押見，1992 ; Scheier,1976 ; 菅原，1982,1986)，それらの研究のなかで，特に菅原(1986)は公的自己意識の強い人に焦点を当てて彼らの詳細な分析を展開している。菅原の研究では，公的自己意識の強い人は“賞賛されたい欲求”と“拒否されたくない欲求”の２つの矛盾する対人態度の方向づけをもっていることが実証されている。また，菅原はこの２つの欲求がいずれも集団のなかに自分の居場所や役割を確保して所属感をえようとする傾向と関連することも明らかにしている。本稿では Feningstein, Scheier & Buss(1975)が開発した尺度を日本

人向けに作成した菅原(1984)[1]の尺度を用いて，私的自己意識と公的自己意識の個人差要因が以下に述べる公私識別に関する社会認識に如何に関連するのかを吟味する。

ところで，社会認識に関する心理学研究においてはこれまで経済の仕組み，社会階層・経済的不平等に関する認識，社会・政治制度の理解などの社会的事象に関する研究(Furth, 1980；木下，1992；田丸，1998)，規範意識に関する研究(Damon, 1990； Kohlberg, 1971；Piaget, 1954)，社会的知識に関する領域特殊理論研究(Turiel,1983)および本研究の主題である公私社会認識に関連するプライバシー（岩田，1987； Newell, 1994；吉田・溝上，1996）やプライベート空間に関する研究（泊・吉田，1999）などが探求されてきた。これらの研究はいずれも興味深い主題に焦点を当てているが，しかし，社会生活を送る上で最も重要と考えられる公私識別に関する社会認識は取り上げていない。

これに対して他方，心理学以外の研究領域では政治的，経済的，歴史的，社会学的観点から公私に関する論考が提出されているが（Benn & Gaus, 1983；佐々木・金，2002；社会心理学会編，1982 など)，これらのアプローチにおいては日常生活で人が如何に公私の社会認識に基づいて行動するのかを具体的に解明していない。筆者は発達社会心理学の観点から日常の社会生活において人が如何に公私の識別をおこなっているのか，また，公私社会認識が自他認識から如何に発生して発達するのか，その発達過程や規定要因ならびに社会認識の特徴を解明することを目指している。発達心理学や社会心理学の研究領域では従来から自他認識や自他関係が最も中心的な研究主題として多数の研究がおこなわれてきたが(Demon, 1990； Harter, 1998； Smith & Hart, 2002； Stern, 1989)，しかし，自他認識や自他関係が社会的文脈下で如何に公私の社会認識へ移行していくのかは必ずしも追求されていない。このような研究状況を踏まえて，筆者は上記の目的を達成するためにこれまで公私の社会行動尺度を構成する作業に取り組んできた。筆者の先行研究では公私の識別が“どのような状

1　菅原では自意識という用語を使用しているが，ここでは自己意識を採用する。

況で意識されるのか”に焦点を当てて，多様な年齢層の調査対象者に公私識別を意識した状況に関する回答を求めて質問紙を作成し，質問紙調査に基づく因子分析からその因子構造を解析してきた（山形，2004；山形・中嶋，2002）。これらの因子分析研究においては尺度構成に関する精緻化作業がなお残っているものの，尺度構成はほぼ完了したと考えられる。そこで，本稿ではさらに研究を進めて，筆者の先行研究で見出された基本的な因子構造に基づき，公私識別の社会認識に影響する諸要因を解明することを目的として自己意識特性に注目した。

筆者が作成した公私認識に関わる社会行動尺度においてはすでに公私識別が意識される諸状況に関する因子が抽出されている。それらの因子は，①公的なものの私的利用，②公的場における自己表出，③公的場におけるマナー，④公的場における身だしなみの4因子である。これらの公私識別の社会認識に関わる因子がどのような要因の影響を受けるのかを分析することが要請されるが，その一つの要因として自己意識特性の相異の影響が想定される。本報告では公私社会認識に自己意識特性の相異が関与するのか，また，それはどの因子と深く関連するのかを調べ，あわせて公私識別概念の妥当性を吟味する。

すでに述べたように，自己意識特性研究では公的自己意識と私的自己意識の個人差要因が自己のどの側面に注意を向け易いかにおいて異なることが明らかにされている。前者では自分の服装や他者に対する言動などの他者から直接観察されやすい自己の側面に注意を向けやすく，状況に左右される傾向が見られること，また，後者では自分の内面や感情などの他者から直接観察されない自己の側面に注意を向けやすく，信念や価値観に従って行動する傾向が指摘されている（菅原，1984,1986；押見，1992）。この知見に従うと，上記の4因子では公的自己意識高群と私的自己意識高群の両群間で公私識別における行動に関して相異が見られると推測される。特に，①の公的なものの私的利用と③公的場におけるマナーは規範意識と深く関連する項目であることから，他の2因子と比較した場合に公的自己意識高群と私的自己意識高群における相異が明確に

見られると予想される。

本報告では菅原(1984)の自己意識尺度を使用して，公的自己意識と私的自己意識の強さが公私識別の社会認識に関わる行動と関連しているか，どのような行動（因子）と関連しているのかを吟味するとともに，あわせて，これらの結果から公私識別行動に関する質問紙項目の妥当性を確認する。以上の目的のためにここでは質問紙調査を大学生に実施して検討する。

方　法

調査協力者

調査協力者は国立大学ならびに私立大学の大学生 454 名である。これらの調査協力者のなかで留学生，社会人学生および質問紙の回答に不備のあった者を除いた 434 名が最終的に分析対象者となった。調査対象者の性別は男子 216 名，女子 218 名であった。また，平均年齢は 19.5 歳である。また，調査対象者は 1 年生から 4 年生の学年にわたり，彼らの所属学部は文学部・法学部・経済学部・教育学部・理学部・医学部・工学部・人間学部と広範であった。

質問紙の構成

質問紙は自己意識尺度と公私識別の社会認識に関わる行動に関する尺度の 2 種類の尺度およびフェースシートから成る。自己意識尺度として私的自己意識・公的自己意識を測定するために作成された菅原(1984)の自己意識尺度日本語版を使用した。自己意識尺度では 7 件法（1. 全く当てはまらない，2. 当てはまらない，3. やや当てはまる，4. どちらともいえない，5. やや当てはまる，6. 当てはまる，7. 非常にあてはまる）で回答を求めた。

また，公私識別の社会認識に関する行動尺度としては山形の作成した尺度を使用した。この尺度は 56 項目からなる公私識別の社会行動についての質問項目から成る。この質問紙は筆者らがこれまで数度の予備的調査をおこない，その因子構造がほぼ確定されたものである。公私識別の社会行動尺度では公私識

別が意識される諸状況が同定され，内的整合性ならびに信頼性の高い4因子が抽出されている。それらは，①公的なものの私的利用，②公的場における自己表出，③公的場におけるマナー，④公的場における身だしなみと命名されている因子である。本報告ではこれらの4因子に関わる質問項目を取り上げて検討する。公私識別の社会行動に関する質問紙では各質問項目の出現頻度に関して5件法（1．まったくない，2．あまりない，3．どちらともいえない，4．時々ある，5．非常によくある）で回答を求めた。

また，フェースシートでは性別，年齢，学年，アルバイトの有無，喫煙経験，携帯電話の所有を問う質問項目を設定した。上記の2種の尺度とフェースシートをひとつの冊子にまとめて，調査協力者に配布した。これらの質問項目は付表に示した。なお，質問紙冊子の回答に要する時間は約15分であった。

手続き

調査は授業を利用した集団調査ならびに大学キャンパス内における手渡しによる個別調査を実施して回答をえた。回答の回収率は100%である。なお，手渡しによる個別調査では，授業での調査と同様に，その場で回答を求める方法を採用した。

結果の分析では質問項目に対する回答の数値を得点とみなして集計をおこなった。自己意識尺度では回答に1～7点を与え，公私識別の社会行動尺度では1～5点を割り当てて，結果を算出した。なお，逆転項目が両尺度に含まれているが，それらでは8－得点あるいは6－得点によって算出して回答値をえた。

結　果

（1）　自己意識尺度の分析

自己意識尺度の回答に関して因子分析（主因子解，バリマックス回転）をおこなったところ，2因子構造がえられ，菅原(1984)と同様な結果が確認された

(Table 1)。そこで，公的自己意識，私的自己意識項目別に自己意識尺度の平均得点を算出したところ，公的自己意識項目では 57.5（男子 56.3，女子 58.5），私的自己意識項目では 50.8（男子 50.2，女子 51.6）がえられた。この結果を菅原でえられた結果（公的自己意識，男子 52.8，女子 56.4；私的自己意識，男子

Table 1．自己意識尺度の因子分析に関する結果

項　　目	因子 1	因子 2	共通性
第 1 因子　公的自己意識(α=.878)			
・自分が他人にどう思われているのか気になる	**.786**	.050	.621
・人前で何かする時，自分のしぐさや姿が気になる	**.772**	.129	.613
・自分についてのうわさに関心がある	**.752**	.004	.566
・人の目に映る自分の姿に心を配る	**.699**	.205	.531
・自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	**.622**	.225	.438
・他人からの評価を考えながら行動する	**.585**	.135	.360
・人に会う時どんなふうにふるまえば良いのか気になる	**.580**	.257	.402
・自分の容姿を気にするほうだ	**.544**	.130	.313
・人に見られていると，ついかっこうをつけてしまう	**.542**	.169	.323
・初対面の人に，自分の印象を悪くしないように気づかう	**.509**	.082	.266
・世間体など気にならない	**.431**	−.041	.188
第 2 因子　私的自己意識(α=.866)			
・ふと一歩離れた所から自分をながめてみることがある	.082	**.724**	.531
・しばしば自分の心を理解しようとする	.220	**.715**	.559
・自分がどんな人間か自覚しようと努めている	.213	**.708**	.546
・つねに自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	−.009	**.676**	.457
・その時々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	.191	**.667**	.481
・他人を見るように自分を眺めてみることがある	−.109	**.649**	.433
・自分が本当に何をしたいのか考えながら行動する	.030	**.566**	.321
・自分を反省してみることが多い	.327	**.495**	.352
・気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ	.166	**.459**	.239
・自分自身の内面のことには，あまり関心がない	.258	**.398**	.225
因子寄与	4.720	4.045	4.010
寄与率	22.476	19.262	19.095
累積寄与率	22.476	41.738	

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

50.3，女子 54.0）と比較すると，公的自己意識では男女ともに本調査結果の方が高い得点がえられたことがわかる。他方，私的自己意識では女子がやや低い得点をえたものの，ほぼ等しい得点がえられた。

次に，自己意識尺度の結果に基づいて公的自己意識が高く，私的自己意識が低い調査対象者（公的自己意識高群）と私的自己意識が高く，公的自己意識が低い調査対象者（私的自己意識高群）の 2 群を選定した。その際には全調査対象者における平均得点を考慮しながら，両群がほぼ同数の調査対象者が含まれるように，公的自己意識高群では公的自己意識得点が 60 以上，私的自己意識得点が 48 以下，　私的自己意識高群群では公的自己意識得点が 55 以下，私的自己意識得点が 53 以上の対象者を選んだ。その結果，公的自己意識高群に該当する対象者は 52 名，私的自己意識高群では 50 名がえられた。次に，この 2 群を公私識別の社会行動において相違があるかを比較するために公私識別の社会行動尺度を分析した。

（2）公私識別に関する社会行動尺度の因子分析

最初に公私識別の社会行動に関する質問項目の回答に関して平均値を算出したところ，極端に片寄った回答（項目の平均得点が 4.5 以上，1.5 以下）が 7 項目で見られた。そこで，これらの項目を除去し，その後に因子分析をおこなった。その結果，スクリュープロットならびに固有値の減衰状況から 4 因子が適切と判断され，4 因子構造を導き出した。最終的に重み付けのない最小 2 乗法，プロマックス回転による結果から因子負荷が 0.36 以上の 17 項目からなる 4 因子を抽出した。これらの因子はそれぞれの因子に含まれる項目から①公的なものの私的利用（5 項目），②公的場における自己表出（4 項目），③公的場における身だしなみ（3 項目），④公的場におけるマナー（5 項目）と命名した。因子分析の結果を Table 2 に示す。なお，各因子の信頼係数（クローンバックのα係数）を算出したところ，Table 2 に示すように，各下位尺度は第 1 因子から第 3 因子では.600 以上で比較的高い値をえたのに対して，第 4 因子ではやや低い内的整合性がえられたが，いちおう許容範囲と考えられた。

Table 2. 公私識別の社会行動尺度に関する因子分析の結果

項　　目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
第 1 因子　公的なものの私的利用(α=.725)					
・職場やアルバイト先の備品を私的に使う	**.803**	−.067	−.072	.224	.704
・勤務時間中に自分のことをする	**.590**	−.110	−.078	.285	.447
・職場やアルバイト先のコピー機を私用に使う	**.572**	−.049	−.005	.179	.361
・学校の備品を私的に使う	**.543**	−.083	−.226	.339	.468
・職場やバイト先の経費を自分達の飲食・・	**.432**	−.107	−.043	.257	.266
第 2 因子　公的場での自己表出(α=.609)					
・職場やアルバイト先では自分の感情を出さない	−.190	**.721**	−.037	−.134	.575
・学校では自分の感情を出さない	−.026	**.589**	−.129	−.089	.373
・職場やアルバイト先の旅行や宴会では自分のありの・・	.024	**.453**	−.035	−.151	.230
・職場やアルバイト先では個人的なことを話さない	−.063	**.400**	−.070	−.100	.179
第 3 因子　公的場での身だしなみ(α=.603)					
・外出する時には身だしなみを整える	−.073	−.188	**.856**	−.047	.775
・外出する時には服を着がえる	−.062	−.061	**.507**	−.044	.267
・公的な場所ではきっちりした服装をする	−.085	.061	**.447**	−.222	.260
第 4 因子　公的場におけるマナー(α=.550)					
・道路や電車の中の通路にすわる	.195	−.093	−.112	**.602**	.422
・電車やバスの中で携帯電話で話す	.294	−.126	.055	**.460**	.317
・図書館で大きな声でおしゃべりをする	.224	−.235	−.052	**.426**	.289
・食べながら歩く	.172	−.070	−.121	**.377**	.192
・タバコの吸い殻やゴミを道路に捨てる	.128	−.048	−.069	**.361**	.153
因子寄与	2.080	1.398	1.317	1.483	2.861
寄与率	12.235	8.224	7.747	8.724	16.829
累積寄与率	12.235	20.459	28.206	36.930	

因子抽出法：重み付け最小 2 乗法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

（3）自己意識と公私識別の社会行動との関連

公的自己意識・私的自己意識と公私識別の社会行動との関連性を調べるために，先ず，公的自己意識高群と私的自己意識高群に該当する対象者の公私識別の社会行動尺度における得点を上記の因子分析の結果にしたがって4因子別に算出した。結果をTable 3に示す。各4因子には，Table 2に示すように，いくつかの質問項目が含まれているが，本分析ではそれらの質問項目の得点を加算して，各因子の得点として算出した。なお，Table 3には公的自己意識高群と私的自己意識高群における各因子の得点のみを示したが，全調査対象者の各因子毎の平均得点を参考までに挙げると，第1因子は10.62（各項目の標準偏差1.21～1.04），第2因子11.51(1.00～1.07)，第3因子12.32(.83～1.02)，第4因子10.76(.84～1.23)であった。

Table 3から公的自己意識高群と私的自己意識高群の自己意識間で相違が認められたのは第4因子の公的場におけるマナーと第1因子の公的なものの私的利用であることがわかる。他の因子では差がえられなかった。そこで，この2因子について統計検定をおこなったところ，第4因子の公的場におけるマナーに関しては公的自己意識高群と私的自己意識高群の両群間に有意な差が見出された($t = 3.815$, $df = 100$, $p < .001$)。この結果は公的場におけるマナーでは公的自己意識高群でマナー違反が多く見られることを示している。また，第1因子

Table 3.　公的自己意識高群と私的自己意識高群の因子得点

因　子	自己意識		
	公的自己意識高群	私的自己意識高群	
公的なものの私的利用	9.98(1.10)	10.38(1.20)	+
公的場での自己表出	11.73(1.00)	11.82(1.20)	
公的場での身だしなみ	12.43(.89)	12.26(.87)	
公的場におけるマナー	11.32(1.29)	10.34(1.29)	***

*** p<.001, + p<.10, ( )内はSDを示す。
公的自己意識高群は公的自己意識得点が高く，私的自己意識得点が低い対象者群を，
私的自己意識高群は私的自己意識得点が高く，公的自己意識得点が低い対象者群を
指す。

の公的なものの私的利用では両群間に傾向による差がえられた($t = 1.739$, $df = 100$, $p < .10$)。公的なものの私的利用では私的自己意識高群が多い傾向が認められた。なお，全調査対象者の結果と比較すると，公的場におけるマナーでは全調査対象者よりも私的自己意識高群はマナー違反が有意に少ない($p < .05$)が，公的自己意識高群では有意にマナー違反が多い($p < .01$)。公的なものの私的利用では全調査対象者と私的自己意識高群では差がなかった。また，第2因子の公的場での自己表出ならびに第3因子の公的場での身だしなみに関しては両群ならびに全調査対象者でほぼ同様な結果をえた。

考　察

本研究では自己意識尺度の結果に基づいて調査対象者を公的自己意識高群と私的自己意識高群の2群に分け，公私識別の社会行動尺度における4因子との関連を調べた。その結果，第4因子の公的場におけるマナーと第1因子の公的なものの私的利用において両群に統計的に有意な差が見出された。他の2因子については有意差がえられなかった。公的自己意識高群と私的自己意識高群の両群で差が見られた公的場におけるマナーに関しては公的自己意識高群が私的自己意識高群に比べてその行動頻度が有意に多く，また，公的なものの私的利用においては私的自己意識高群において行動頻度が多い傾向をえた。

自己意識特性に関する仮説によれば，公的自己意識の強い人は集団や対人関係に規定され，自己コントロールの弱い傾向が見られるのに対して，私的自己意識の強い人では内的な自分の信念や規準・価値観に従った行動が見られることが指摘されている。第4因子の公的場におけるマナーでは公的自己意識高群で私的自己意識高群や全調査対象者の平均よりもマナー違反が多く見られ，他方，私的自己意識高群では全調査対象者の平均よりもマナー違反が少なかった。これらの結果は上記の指摘とよく一致している。すなわち，もしも公的自己意識高群と私的自己意識高群の2群で彼らがもつ規準や価値観に違いがない

と想定すると，両群の差は公的場における行動の相違に帰せられる。その場合，私的自己意識高群では自己の信念や規準や価値観に従って行動がおこなわれるのに対して，公的自己意識高群では状況依存的な行動が導出されて，マナー違反が増加したと解される。しかし，この解釈は両群のもつ規準や価値観が等しいとする仮定に基づいており，本研究ではこの点を確認できるデータがないために本要件が満足されているか否かは不明である。今後，自己意識特性と規範意識・価値観との関連を検討し，この点を確認する必要があるだろう。

また，第1因子の公的なものの私的利用に関しては私的自己意識高群と全調査対象者の平均と比較して，公的自己意識高群は私的利用が少ないことが示された。この結果は私的利用という規範に違反する行動が公的自己意識高群よりも私的自己意識高群と全調査対象者で多く見られることを示しており，一見自己意識特性の見解と矛盾しているように思われる。しかしながら，菅原(1986)の研究に依拠すれば，この結果は必ずしも自己意識特性の見解と矛盾していないと解される。すなわち，公的自己意識の高い人は所属感を重視し，自己の置かれている状況に適した行動を“拒否されたくない欲求”あるいは“賞賛されたい欲求”からおこなうと解釈するならば，説明が可能である。公的自己意識の高い人は集団や状況への所属感に重きを置くために私的利用を抑制する傾向があると推察される。他方，私的自己意識の強い人は平均的な全調査対象者と同様に，特に“拒否されたくない欲求”や“賞賛されたい欲求”に基づいて集団や状況への所属感をえるために行動しないために抑制的な公的自己意識高群よりも私的利用が多く見られたと解される。このように菅原の研究に依拠して解釈すると，公的自己意識の強い人の一見矛盾しているように見える行動も説明可能であることがわかる。さらに，この結果を敷衍すると，前述の公的場におけるマナーに関する行動に関しては次のように把握できるのではないだろうか。すなわち，公的場におけるマナーでは広く不特定多数の人々が存在する状況におけるマナーを問題としており，特定集団への所属感をえようとする行動とは無関係であるために，マナー違反が公的自己意識高群で多く出現したとも

いえよう。

ところで，第2因子の公的場での自己表出や第3因子の公的場での身だしなみに関する行動では本研究において公的自己意識高群と私的自己意識高群の両群に差が見られなかったが，従来の研究では公的自己意識の強い人は自分の容姿や化粧，服装への関心が強いという指摘がなされている(押見，1992；菅原，1986)。このような結果の相違は現段階では十分に説明できないが，しかし，本研究の自己表出ならびに身だしなみ因子に関しては社会生活を送る上で要求される一般的な行動を指しているために，両群で差が認められなかった可能性が推定される。今後は先行研究と本研究で使用された項目を綿密に吟味することを通じて研究結果間の不一致を探っていく必要があろう。

本研究では自己意識と公私識別の社会行動との関連を検討したが，自己意識特性が公私識別の社会行動，特に公的場におけるマナーならびに公的なものの私的利用と関連することが明らかにされた。また，上記の考察から公的場には特定の集団への所属や人間関係が重視される状況とそうではない不特定多数の人々が存在する一般的な状況があることが示唆された。人はこのいずれの状況に置かれるかによってその行動が規定され，影響を受けると推測される。本研究で用いた公私識別の社会行動尺度ではこの両状況を明確に区別していないが，今後，これらの状況の区別を踏まえて公私が識別される状況を緻密に解析し，その社会認識の様相を解明していくことが求められよう。また，あわせて自己意識特性と関連して，規範意識や価値観やその他の要因と公私社会認識との相互関係も追求することも重要な検討課題と思われる。

引　用　文　献

安藤清志・押見輝男（編）　1998　自己の社会心理　対人行動学研究シリーズ6　誠信書房.

Benn, S.I. & Gaus, G.H. (Eds.), 1983 Public and private in social life. St. Martin's Press : New York.

Buss, A.H. 1980 Self-consciousness and social anxiety. San Francisco : Freeman.

Carver,C.S., & Scheier, M.F. 1978 Self-focusing effects of dispositional self-consciousness, mirror presence, and audience presence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 324-332.

Damon, W. 1983 Social and personality development. W.W. Norton & Company, Inc. 山本多喜司（編訳）1990 社会性と人格の発達心理学 北大路書房.

Duval, S., & Wicklund, R.A. 1972 A theory of objective self-awareness. New York : Academic Press.

Feningstein, A. 1979 Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**, 75-86.

Feningstein, A. 1984 Self-consciousness and the overperception of self as a target. *Journal of Personality and Social Psychology,* **47**, 860-870.

Feningstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **43**, 522-527.

Furth, G.H. 1980 The world of grown-ups -Children's conceptions of society. Elsevier, North Holland, Inc. 加藤泰彦・北川歳昭（編訳）1987 ピアジェ理論と子どもの世界ー子どもが理解する大人の社会ー 北大路書房.

Harter, S. 1998 The development of self-representations. In Damon, W.(Ed.) Handbook of child psychology. Eisenberg, N. (Volume Ed.) Vol.3 : Social, emotional, and personality development. Chapter 9. John Wiley & Sons., Inc. Pp. 553-618.

Helwig, C.C., & Turiel, E. 2002 Children's social and moral reasoning. In Smith, P.K.,& Hart, C.H. (Eds.) 2002 Blackwell handbook of childhood social development. Blackwell Publishers. Chapter 24. Pp.475-490.

梶田叡一 1988 自己意識の心理学 東京大学出版会.

木下芳子 1992 社会についての理解 新児童心理学講座 8, 第 VI 章 金子書房 Pp.217-259.

岩田 紀 1987 日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係 社会心理学研究, **3**, 11-16.

Kohlberg, L. 1971 From is to ought. In T. Michel (Ed.) Cognitive development and epistemology. Academic Press. 永野重史（編） 1985 道徳性の発達と教育ーコールバーグ理論の展開ー 新曜社.

工藤恵理子 1990 特性的自己意識と活性化された情報処理過程の関係について 社会心理学研究, **6**, 14-22.

Newell, P.B. 1994 A systems model of privacy. *Journal of Environmental Psychology,* **14**, 65-78.

日本社会心理学会（編） 1982 年報「社会心理学」 23.

押見輝男 1992 自分を見つめる自分 ー自己フォーカスの社会心理学ー サイエンス社.

Piaget, J. 1954 大伴茂（訳）児童道徳判断の発達 臨床児童心理学Ⅲ 同文書院

佐々木毅・金泰昌（編） 2002 公共哲学 3 日本における公と私 東京大学出版会.

Scheier, M.F. 1976 Self-awareness, self-consciousness, and angry aggression. *Journal of Personality,* **44**, 627-

644.

Scheier, M.F. 1980 Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology,* **39**, 514-521.

Scheier, M.F., Feningstein, A., & Buss, A.H. 1974 Self-awareness and physical aggression. *Journal of Experimental Social Psychology,* **10**, 264-273.

Smith, P.K., & Hart, C.H. (Eds.) 2002 Blackwell handbook of childhood social development. Blackwell Publishers.

Stern, D.N. 1985 The interpersonal world of the infant : A view from psychoanalysis and developmental psychology. Basic Books, Inc., New York. 小此木啓吾・丸田俊彦（監訳）1989 乳児の対人世界 ー理論編ー 岩崎学術出版社.

菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み，**55**, 184-188.

菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求ー公的自意識の強い人に見られる２つの欲求についてー 心理学研究，**57**, 134-140.

田丸敏高 1997 社会的事象の理解とその発達 井上健治・久保ゆかり（編）子どもの社会的発達 第７章 東京大学出版会 Pp.131-149.

泊 真児・吉田富二雄 1999 プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社会心理学研究，**15**, 77-89.

Turiel, E. 1983 The development of social knowledge : Morality and convention. Cambridge, England : Cambridge University Press.

Wicklund, R.A. 1975 Objective self-awareness. In L. Berkowitz(Ed.), Advances in experimental social Psychology. Vol.8. New York : Academic Press.

山形恭子 2004 公私の社会認識に関わる行動に影響する要因の分析 日本心理学会第68回大会発表論文集，138.

山形恭子・中嶋順子 2002 公私の社会行動尺度に関する検討 日本社会心理学会第44回大会発表論文集，826-827.

吉田圭吾・溝上慎一 1996 プライバシー志向性尺度（本邦版）に関する検討 心理学研究，**67**, 50-55.

付表1　公私の社会行動尺度（山形，2004）

下記の項目についてあなたはどう思いますか。最もあてはまるところに，例に示すように，○印を記入して下さい（もし，あなたにあてはまらない項目がある場合には回答をしなくともよいです）。

	非常によくある	時々ある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
記入例　散歩に行く。					

	非常によくある	時々ある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
1　他人宛ての手紙は開封しない。					
2　勤務時間中は全力で仕事をする。					
3　公的な場所では，きっちりした服装をする。					
4　歩きながらタバコを吸う。					
5　外出する時には身だしなみを整える。					
6　図書館で大きな声でおしゃべりをする。					
7　学校では自分の感情を出さない。					
8　職場外では上司を名前（山田さんなど）で呼ぶ。					
9　機嫌が悪いと，家族に当たる。					
10　学校の備品を私的に使う。					
11　外出する時には服を着がえる。					
12　他人宛ての葉書をのぞき見する。					
13　職場やアルバイト先の電話を私用に使う。					
14　式や改まった場所には，ふさわしい服装で出席する。					
15　タバコの吸殻やゴミを道路に捨てる。					
16　職場やアルバイト先でユニフォームに着がえると，仕事向きの顔になる。					

17 職場やアルバイト先では個人的なことを話さない。

18 職場やアルバイト先の旅行や宴会では大はしゃぎする。

19 多数の人の前で話す時には改まった言葉使いをする。

20 電車の中でお化粧する。

21 家では服装に無頓着である。

22 職場やアルバイト先では私情をはさまず判断する。

23 電車やバスの中で携帯電話で話す。

24 会の経費を自分達の飲食のために使う。

25 職場やアルバイト先のコピー機を私用に使う。

26 先生や上司に対して両親のことを父母（フボ，チチ・ハハ）という。

27 職場やアルバイト先では自分の好みに従って判断する。

28 自分の機嫌が悪いと，部下や目下の者に当たる。

29 改まった場所に普段着で出席する。

30 職場やアルバイト先の電話は仕事のために使う。

31 食べながら歩く。

32 職場やアルバイト先で決まったことは守る。

33 職場やアルバイト先では自分の感情を出さない。

34 職場やアルバイト先の経費を自分達の飲食のために使う。

35 図書館で静かに本を読む。

36 勤務時間中に自分のことをする。

37 電車やバスに乗る時，順番にならぶ。

38 職場やアルバイト先では自分の物を自分のお金で買う。

39 職場やアルバイト先の備品を私的に使う。

40 個人情報は守る。

41 私的な場所で自分の社会的地位を自慢する。

42 授業時間中に自分のことをする。

43　職場やアルバイト先では上司を役職名（店長・課長など）で呼ぶ。

44　電車やバスに乗る時，早く乗って席をとる。

45　家では自分のありのままを出す。

46　道路や電車の中の通路にすわる。

47　自分の疲れを職場やアルバイト先で見せない。

48　会合で発言する時，普段と同じ言葉使いをする。

49　図書館の本に赤線をひいたり，書き込みをする。

50　仕事上で知った情報は外部にもらさない。

51　集団活動中に自分勝手な行動をする。

52　仕事の手を抜く。

53　職場やアルバイト先の旅行や宴会では自分のありのままを出さない。

54　先生や上司に敬語を使う。

55　仕事の責任をとる。

56　親友には個人的なことを話す。

付表2　自己意識尺度（菅原，1984）

以下の項目は，あなたにどの程度あてはまるでしょうか。「7．非常にあてはまる」から「1．全くあてはまらない」のうち最も近いものひとつに○をつけてください。

非常にあてはまる						全くあてはまらない
7	6	5	4	3	2	1

1　初対面の人に，自分の印象を悪くしないように気づかう。

2　自分がどんな人間か自覚しようと努めている。

3　気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。

4　自分についてのうわさに関心がある。

5　自分が他人にどう思われているのか気になる。

6　しばしば，自分の心を理解しようとする。

7　人に会う時，どんなふうにふるまえば良いのか気になる。

8　ふと，一歩離れた所から自分をながめてみることがある。

9　人に見られていると，ついかっこうをつけてしまう。

10　人の目に映る自分の姿に心を配る。

11　その時々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい。

12　自分を反省してみることが多い。

13　自分の容姿を気にするほうだ。

14　自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。

15　人前で何かする時，自分のしぐさや姿が気になる。

16　自分が本当に何をしたいのか考えながら行動する。

17　世間体など気にならない。

18　つねに自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。

19　自分自身の内面のことには，あまり関心がない。

20　他人を見るように自分をながめてみることがある。

21　他人からの評価を考えながら行動する。